

令和6年度東京都広報コンクール 総評 広報紙部門

金井委員

今回の広報コンクール（広報紙部門）には43紙の応募作品がありました。いずれの特集記事も、地域がかかえる課題をとりあげ、丁寧な取材にもとづいた紙面づくりがなされていて、企画・編集での高い技術が感じられました。そのなかでもとくに受賞作品の特集記事は、読者に意識行動変容を促すという目的を実現するための要素がしっかり伝わる構成と表現になっていました。今回、最優秀の『あだち広報』の特集テーマは“地域を守ってきた荒川放水路”。一席の『広報千代田』のテーマは“いつまでも自分らしく生きること”。いずれも奇をてらったものではありません。過去に何度も特集のテーマとなってきたものですが、地域社会の変化を踏まえた切り口や表現には新しさと独自の工夫を感じました。

今回の受賞作品と惜しくも受賞を逃した作品との差はほとんどありません。どの自治体にあっても企画力、編集力ともに着実に向上していると思います。東京都下の行政広報紙の品質の高さをあらためて感じました。

坂井委員

広報紙部門には 43 の応募がありました。どの広報紙にも、地域が抱えている課題や独自の取り組みなどを取り上げた特集が生まれ、幅広いニーズに応える行政情報が並べられています。今回の審査では、特集テーマをなぜ今伝えたいのかという意味と創意工夫、特集を含めた広報紙全体における情報の整理とわかりやすさという 2 点に着目しました。

最優秀賞の足立区の対象作品は、通水 100 年を迎える「荒川放水路」についてその歴史や意義を伝える特集が組まれていました。固めのテーマではありませんが、区職員を模したキャラクターを作って情報をナビゲートしたり、固有名詞や専門用語にはルビを振ったり、写真を効果的に使って目をひいたりという工夫がなされていて、この特集をできるだけ多くの方に読んでほしい、知ってほしいという担当者の強い意思が紙面から伝わってきました。

全体を通して印象に残ったのは、多くの広報紙で、QR コードを使った自治体ホームページへの誘導をはじめ、ラジオ・ポッドキャストや YouTube などへの誘導を図ってより広く深い情報を提供するというメディアミックスの手法が取られていたことです。多様化・複雑化する住民のニーズに対応するため、動画や音声などのコンテンツでいろいろな角度から情報をわかりやすく伝えることが求められているのだと思います。その一方、住民が直接手に取る「広報紙」という存在は、情報のエッセンスを整理して伝え、さらに情報のハブ・インデックスとしての大きな役割があると再認識し、同時にさらなる可能性も感じました。

このご時世、広報にかかる人的・金銭的成本も厳しくなっているのだろうと推測します。職員の内製で工夫して制作しているところ、外部委託化を進めて広報担当の負担を減らしているところなど、限られたリソースで充実が図られています。住民サービスの重要なインフラとしての広報紙に今後も期待いたします。